

Q.この度は大変クリエイティブな企画をありがとうございました。まずは三島元樹さまのプロフィールや主な仕事内容を教えていただけますか？

A. 日本大学芸術学部放送学科在学中から音楽活動を始め、その後、映像制作会社でサウンドデザイナーとして TVCM や商品プロモーション映像などの制作に携わりました。独立してからは個人音楽プロダクション STUDIO MONOPOSTO を立ち上げ、Web CM や企業のプロモーション映像、インディーズ映画のサントラ制作などの音楽制作をしています。2017 年秋からは映像作品の MA(マルチ・オーディオの略。BGM やナレーション、効果音などの音質を整え、音量バランスを取る作業)のオンラインサービスも展開しています。それらと並行して、アーティストとしての自分の作品をプライベートレーベル monoposto records からリリース(CD、または配信)したり、年に数回のコンサート活動などを行ってます。その他、映像制作の専門誌「ビデオ SALON」(玄光社)にて音声技術に関する長期連載を執筆していたり(2019 年現在)、請われて音声セミナーの講師などをすることもあります。

STUDIO MONOPOSTO Web サイト <http://monoposto.ciao.jp>

Q.この度は「Decaying Flowers」というタイトルで開催されました。具体的な内容とコンセプトを教えてくださいいただけますか？

A. 「Decaying Flowers」とは「朽ちゆく花」という意味です。今回のコンサートは、自分の美意識を全面に押し出したものにしてみました。朽ちゆくものの儚さ、美しさ、そして 恐怖と畏敬の念。そういったものが根底にあります。また、「Decay」は本来「減衰」という意味なので、そこにピアノの減衰音のイメージを重ねています。これらのコンセプトのもとに選曲したり新規作曲したりしました。内容としては、いままでコンサートで弾いてきたようなピアノソロ曲が半分。残り半分は自然の音や人工物の音など、日頃のフィールドレコーディングで録り溜めている音素材をテクノロジーを使って加工し、そこにピアノやシンセサイザーを加えて音楽に仕立てた作品……ポスト・クラシカルやエレクトロニカ、アンビエントと言われるようなジャンルの音楽を入れ込みました。こういった音楽は、一部の音楽好きにはだいぶ前から浸透しているのですが、一般にはそこまで浸透していないなと感じていました。僕自身、人前での演奏はほぼピアノソロだけで、こういった作品を作ってリリースしてもライブ演奏はしてきませんでした。なので「これではイカン…もっとアピールしなきゃ！」と思ったわけです(笑)。個人的なチャレンジとしては、現代音楽的アプローチの作曲法と演奏法を実践することでした。ダイスを使ってその都度作曲する、観客を巻き込んだ音空間の構築、非楽音を多用することによる新たな音色感覚の覚醒、ピアノのペダルを使った特殊奏法などがそれですね。こういった手法は戦前から存在しますが、「よく理解できない」といったイメージがあると思うので、その辺の魅力を僕というフィルターを通して知ってもらいたいという狙いがありました。お客さまの感想などを聞くと、どうやら成功だったようなのでホッとしています(笑)。

Q.作曲家／アーティスト／エンジニアの三島さまにとって「音楽」や「芸術」とはどういうものですか？

A. 何なんでしょうね？(笑)。ひとつ言えるのは「言語に近い」ということでしょうか。実は僕、中学生の頃はモノ書きになりたいと思ってたんです。小説家とか。文字は、事実だろうと空想だろうと、正確かつダイレクトに伝えられるところが優れていると思うんです。けど、音楽はその辺りがとても曖昧じゃないですか。自分が音楽で表現したものが、そっくりそのまま聴き手に伝わるわけではない。人によって受け取り方が違う。もちろん文字でも曖昧な表現は可能ですが、音楽は正確な伝達はまず不可能です。それなのに、様々な感情を喚起させたり、思索を巡らせたり、身体運動を誘発したりできる。音楽のそういうところが面白いと思うし、性に合ってるなど。それに、僕は喋るのも得意ではないですしね(苦笑)。なので、僕にとって音楽は、言葉の代わりに出てくるもの……やはり「言語」という感覚が適当かもしれないですね。不自由な言語(笑)。文学や絵画、彫刻など他の芸術はいまのところ自分で創作はしませんが、常に触れていますね。それらから刺激を受けて音楽を作ることも多々ありますが、そういうのを抜きにして単純に「好き」なんです。特に小説は、常に手元に1冊は持って読んでないと不安になるレベル。芸術に触れることは「心の調律」だと思ってます。そうそう、写真は学生時代からずっと撮ってますね。今回のコンサートのフライヤーに使ったビジュアルも、自分で撮った写真を加工したものです。音楽同様、写真にも僕の美学が色濃く表れてますね。

Q.普段、エンジニアとして機材を扱うことの方が多いと思いますが、今回はスタインウェイのグランドピアノでソロ演奏を多数されましたね。生演奏をした感想は？また、ピアノという楽器の可能性をどう思いますか？

A. 確かにアコースティックピアノは自宅スタジオには置いてないので、常に触れているわけではないですが、友人のスタジオや懇意にしているサロン、お世話になってるピアノ店などで定期的に弾いてます。一番慣れているのはベーゼンドルファーですが、NYスタインウェイもコンサートや練習で触れることが多いので、ラヴァージョンさんのこのピアノは試弾した時点で安心感を持ってました。とはいえ、もちろんピアノの個性や状態は会場によってまちまちです。なので、本番はいつも大変。思い描いた音を出すために試行錯誤の連続(汗)。今回もウナ・コルダの制御には苦労しました。踏まないと倍音が出過ぎるし、踏みすぎると逆に倍音が少なすぎちゃう。演奏中も1cm単位で踏み分けてるんですが、修行が足りないのでもつちに意識を持っていきすぎてミスタッチすることもしばしば(苦笑)。それでもピアノを弾く一番の理由は、ピアノは電気や他の機材がなくても、それ1台あれば自分の音楽を顕せるからですね。短気というか、せっちな僕にはぴったりの楽器なんですよ(笑)。けど、それと同じくらいテクノロジーを使った音楽が好きで、たくさん作ってるんです……が、クラシック系のサロンにはそういった機材がないのが普通だし、そもそも演奏するパートがない曲も多いので、どうパフォーマンスしよう……と、なかなか踏ん切れなかったんです。でも、今回は良いチャンスだなと思ったので、ラヴァージョンさんからコンサート企画のお話をいただいたときに、もうやっちゃえ！と(笑)。必要機材をメーカーからお借りしたり、電車移動で運べるようなコンパクトなシステムを組むのは大変でしたが、お客さまの感想なんかを聞いても、やって良かったなと思います。ピアノの話に戻りますが、今回演奏した曲の中には特殊奏法を使ったものがありました。ペダルだけを使って残響を伴った「ドーーーーン」という低音を響かせる奏法ですね。ピアノって鍵盤を弾いた音

以外にもいろんな音が出せるんです。内部奏法などは専門的な知識とケアが必要なものでなかなかやれないですが、ペダルだけでもそういった面白い音が出せるんです。ピアノは、およそ 100 年前にはすでに現在のカたちになっていた「完成された楽器」ですが、まだまだ音現象として面白い音を出せるポテンシャルはあるし、また、そういう音を出す人が増えるといいなと思ってます。あとは、フォルテピアノなどで使われていたような、音色に変化をもたらす仕掛けや、レオナルド・ダ・ヴィンチのヴィオラ・オルガニスタのような持続音を得られる仕掛けが復活してくれると面白いなと思いますね。実は、10 年ほど前に某企業が開発したアクチュエータの試作品を使ってピアノで持続音を得る実験をしましたが、見事に失敗しました(苦笑)。

Q. 今後のご計画や展望... そのほか何でもありましたらお聞かせいただけますか？

A. 今回このコンサートをやってみて、普段はクラシックやポップスしか聴かない人でも、ポスト・クラシカルやアンビエントなどの音楽を楽しんでもらえるということが分かったので、今後はピアノソロだけでなく、こういった現代的なテクノロジーとクラシカルな要素を併せ持った音楽を演奏する機会も増やしていきたいですね。また、今回の曲目にも取り入れた現代音楽的な作曲技法や演奏法なども、もっと研究してどんどん取り入れていきたいです。あとは、サウンド・インスタレーション(音響彫刻)ですね。もう 10 年以上前から考えてるんですが、そろそろテクノロジーが僕の妄想に追いついてきたので、実現させたいです(笑)。